「平和の指標」

学校法人カトリック沖縄学園　沖縄カトリック高等学校　2年生

上原（うえはら）　凜（りん）

最近沖縄の観光界を賑わせている話題といえば、やはり、ＵＳＪの建設だろう。その計画を知ったときに、私も周囲の友人もとても嬉しく思った。しかし、一方で、私はだんだんと「沖縄らしさ」が無くなってきているように思えてならない。沖縄をモチーフにするとはいっても、テーマパークである以上、無個性な画一化を免れないからである。これは、「沖縄らしさ」が無くなってきていることに対し、遠くで鳴り響く危険を知らせる「非常ベルの音」に思えてならない。

小学生の頃から、私には自然の渚を訪れる機会がたくさんあった。自然の渚とは、森と海がひとつらなりになっていて、浜にはオカヤドカリを始め、多種多様な生物が生息している命にあふれた場所である。恩納村の屋嘉田潟原という浜辺で採取し、ソーメンチャンプルーにして食べたイソハマグリの味。広大な大嶺海岸をどこまでも歩いて、本島最西端に到着した喜び。自然の渚は、私に宝物のような時間と体験をもたらしてくれた。

残念なことに今日の沖縄では、経済振興政策に伴い、豊かな自然の渚は次々と姿を消し、無機質なコンクリートで覆われている。このような状況に陥った理由を私なりに考えてみた。

現在の日本社会は、物質主義に陥っているように感じる。精神的な豊かさよりも物質的な豊かさ、価格に換算できるものに価値を見出したり、自然を利用しやすいようにコントロールしようとしているように思う。これは人間のエゴが大きくなった結果かもしれない。豊かな自然を育んできた沖縄でも、自分の利益追求に没頭し、自然の美しさを感じる余裕が無くなってきているのではないだろうか。これが沖縄の本来持っていた個性を弱めているように思う。「沖縄らしさ」を失うことは、ウチナンチュとしての自分を支えるアイデンティティーを失うことにつながっていく気もする。だから、私には沖縄の観光が無個性な画一化の道をたどっているように見え、ウチナンチュとしての「非常ベルの音」にも聞こえるのである。

こうした危機意識もあって、私はゴールデンウィークに辺野古の新基地移設問題で揺れている瀬嵩浜を訪れた。瀬嵩浜は、本島に残されている数少ない自然の渚の一つで、世界的にも生物多様性が高いホットスポットといわれてい

る。初夏の瀬嵩浜は大潮で、遠くまで潮が引いていた。渚には、たくさんの貝がゆりあげられ、親子連れが海水浴を楽しんだり、一ヶ月遅れの浜降り（ハマウリ）を楽しんでいた。海上には、オレンジ色のオイル・フェンスが張られ、巡視船もたくさん浮かんでいたが、そんなことは全く気にならないくらい、渚は美しかった。寄せる波のリズムに身も心もゆったりとなりながら、数時間渚歩きを楽しんだ。そろそろ帰ろうかという頃、私は瀬嵩浜の象徴であるミツワカ岩の下で、「ハルシャガイ」というペルシャ模様の５ｃｍほどの巻き貝がゆりあげられているのを見つけた。この美しい「渚からの贈り物」を見つめながら、これこそまさに観光の醍醐味なのではないだろうかと思った。

確かに、流行の音楽は多くの人を魅了する。しかし、人気が高ければ高いほどすぐに飽きられてしまうだろう。だが、クラシック音楽は、長期に渡り、人々の心に留まっている。サスティナブル（持続可能）な社会発展が叫ばれるこの時代に必要なことは、数百年後まで残り続ける本物の自然を大切にし、自然と共存できる観光産業を創り出すことではないだろうか。

高知県の黒潮町に「砂浜美術館」がある。そこは、「砂浜が美術館」というコンセプトの下、入野浜という長さ４ｋｍの自然のままの砂浜を「美術館」に見立てて、様々な観光産業につなげている。自然と共存した観光とは、「発想転換」をキーワードとした観光、創造に挑戦することだと思う。「砂浜美術館」のようなユニークな試みは、これからの時代の観光産業のモデルになるだろう。私は沖縄も自然の渚を軸にして、芸術や教育や健康の分野とつなげた観光産業をセンス良く創造できると信じている。

本物の自然が残っているということは、そこがどれだけ平和であるのかを示す指標だといえるだろう。「平和」を意味するシマクトゥバに、「テーミヌユー」という表現がある。それは、「蛍のまたたきが守られている世の中」という意味だそうだ。蛍のような小さな生き物が安心して生きられる自然があることこそ、まさに「平和」ということである。

自然を大切にすることは、持続可能な未来につながる沖縄の観光の姿である。瀬嵩浜にゆりあげられたハルシャガイは、自然からのメッセージを伝えにきてくれたように思える。

自然と共存するためには、自然を美しいと感じることができる、豊かな感受性を持つことが必要である。時間や気持ちに余裕がなければ、なかなか持つことのできない、言い換えると、心が平和でなければ豊かな感受性は得られないのである。その豊かな感受性は、人工物からでは育たない。生命は、生命が育てるのだ。

平和の島、沖縄の目指すべき観光とは「平和の指標」である豊かな自然と共にあるべきだと考える。